

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00383

研究課題名（和文）米国モダニズム文学と女性ファッション雑誌との相互影響関係についての研究

研究課題名（英文）A Study of the Mutual Influence of American Modernist Literature and Women's Fashion Magazines

研究代表者

山本 裕子（Yamamoto, Yuko）

千葉大学・大学院人文科学研究院・准教授

研究者番号：80545377

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、米国モダニズム文学と「高級大衆雑誌」との相互影響関係を解明するため、あえて一般的にはより関係が希薄であると考えられている男性モダニスト作家と女性高級ファッション雑誌との関係を調査検討することにより、その相互影響関係を実証することを目的とした。三年間の研究期間において、作家William FaulknerとJames Ageeの雑誌仕事を取り上げ、彼らがどのように雑誌編集方針と交渉したのかを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、モダニズム研究と雑誌研究の双方に資する学際研究である。大戦間期から戦後にかけてのモダニズムと大衆文化の関係を捉え直した本研究は、モダニズムは「芸術のための芸術」として発展したという従来の定説を覆したという点において学術的意義があるものである。

研究成果の概要（英文）：By examining the relationship between male modernist writers and women's fashion magazines, this study aimed to demonstrate the mutual influence of modernist literature and glossy magazines in the U.S. Through three years of research, I focused on the magazine works of William Faulkner and James Agee and detailed how they negotiated with the editorial policies of the magazines.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：アメリカ モダニズム 雑誌 文学 William Faulkner

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

一九九九年と二〇〇〇年、英米モダニズム研究を雑誌研究の立場から問い直す、影響力のある二つの図書 Lawrence Rainey, *Institutions of Modernism* (1999); Mark Morrisson, *The Public Face of Modernism* (2000) が相次いで出版された。この二つの研究は、「モダニズムは雑誌から生まれた」という当たり前の事実を指摘したのであったが、この指摘は、出版の最終形態としての「図書」を特権視してきた従来の文学研究のあり方そのものを覆す、非常に画期的なものであった。しかしながら、二人のいう「雑誌」とは、流通量が限定されていた前衛的な「リトル・マガジン」を指しており、特権的なエリート階級のためのモダニズムという見方に疑問を投げかけるものではなかった。

しかし、近年、流通量が多く幅広い読者層に読まれていた大衆雑誌とモダニズムとの関係を解明しようとする研究が数多く出されるに至った。その背景には、「高尚」とされるモダニズムが、実際には大衆文化と交渉しながら形成されていったのではないかという視座がある。こうした視座が有効であることは、以下の優れた研究が示した George Bornstein, *Material Modernism* (2001); Robert Scholes and Clifford Wulfman, *Modernism in the Magazines* (2010); and Donal Harris's *On Company Time: American Modernism in the Big Magazines* (2016). こうした研究により、大衆雑誌とは対極にある高尚なモダニズム文学という、文学研究における「既成概念」が覆されることとなったのである。

だが、こうした大衆雑誌とモダニズムとの関係を問い直す重要な研究は、当然のこととはいえ、モダニスト作家が短編を数多く出版した文芸寄りの雑誌 (*Harper's*, *Scribner's*, *Collier's*, *Saturday Evening Post* 等) に研究対象が集中してきた。大衆雑誌とモダニズムの成立過程における交渉の全容を解明するには、問題意識を共有するモダニスト・雑誌研究者が各自の専門性を活かしながら対象とする時代や雑誌を絞り、数多くの地道な実証作業を積み上げる必要がある。

ここ 8 年ほどモダニスト文学と写真との学際研究 (とりわけ Walker Evans と Hemingway、Walker Evans と Faulkner の繋がりについて) を進めた本研究遂行者は、派生的に、モダニスト作家と写真家との間に介在する女性ファッション誌 (*Vogue*, *Harper's Bazaar*, *Cosmopolitan*) の存在があるという意外な事実気づくに至り、男性モダニスト作家と女性高級ファッション雑誌との相互影響関係を問うという本研究の着想を得た。この着想の土台となる研究としては、国際学会 ("When Faulkner Was in *Vogue*: Modernism and the Women's Magazine at the Midcentury" International Conference LERMA (Laboratoire d'Etudes et de Recherche sur le Monde Anglophone, 2018) および雑誌論文 ("When Faulkner Was in *Vogue*: The American Women's Magazine Fashioning a Modernist Icon" *The Journal of Modernist Periodicals* 11.1 (2022) にて発表した。

本研究においては、これまでの研究から重要な切り口となると考えられた、米国モダニズム文学と「高級大衆雑誌」との相互影響関係に注目した。通称「グロッキー・マガジン」や「スリックス」と呼ばれる、写真を多用し、大型の光沢紙を用いた「高級大衆雑誌」(*Time*, *Life*, *Fortune*, *Esquire*, *Vogue*, *Harper's Bazaar* 等) は、例えば David M. Earle, *Re-Covering Modernism* (2009) が扱った *Esquire* と Ernest Hemingway といった目立つ例を除き、モダニスト作家との関連が取り上げられてこなかった。だが、本研究遂行者が発見したように、William Faulkner と女性ファッション誌との繋がりなど、「高級大衆雑誌」とモダニスト作家たちの間には、これまで知られていない相互影響関係が隠れている可能性があった。このことは、より広い視座から見れば、写真というメディアの勃興がモダニズム文学の成立過程に果たした役割という問題に繋がるだろう。モダニズムと「高級大衆雑誌」との相互影響関係という未解明の問題と取り組むことは、モダニズムの成立過程における写真の影響を明らかにするのみならず、現在進行中のモダニスト雑誌研究に一定の方向性を示す。この重要な問題と取り組むことは、いち早くモダニズムと写真との学際研究に従事してきた研究者としての急務であると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、米国モダニズム文学と「高級大衆雑誌」との相互影響関係を解明するため、あえて一般的にはより関係が希薄であると考えられている男性モダニスト作家と女性高級ファッション雑誌との関係を調査検討することにより、その相互影響関係を実証することを目的とした。

上述したように、米国モダニズム文学と「高級大衆雑誌」との関係は、従来考えられてきたよりも実際は密接である可能性がある。図書よりも流通量が多く、幅広い読者層に「読まれていた」だけでなく「見られていた」モダニズムとは、いったいどのようなものか。本研究は、雑誌研究

の知見をいかし、米国における「高級大衆雑誌」とモダニズムの相互影響関係を解明する学術的「問い」 「高級大衆雑誌」がモダニズム成立に果たした役割はどのようなものか、そしてモダニズムが「高級大衆雑誌」に与えた影響とはどのようなものか を本研究課題の核心をなすものとして据えた。

3. 研究の方法

本研究は、四年間の計画で、米国の二大女性ファッション雑誌 *Vogue* と *Harper's Bazaar* を取り上げ、雑誌記事および宣伝にあらわれる代表的男性モダニスト作家 Hemingway と Faulkner に関連する表象を網羅し、それら表象を雑誌編集方針と作家キャリアの両面から分析する。分析には、書簡やゲラ刷り等の未公開アーカイヴ資料を用いる。これにより、雑誌が作家のイメージ戦略や作品普及に果たした役割、そして作家側が雑誌に与えた影響を明らかにする。ただし、相互影響関係という観点から、調査対象期間は作家の生存中に限ることとする。

しかしながら、米国で行うはずであったアーカイヴ調査は、新型コロナウイルス感染症の世界的流行により、中止せざるを得なかった。そのため、代表的男性モダニスト作家と二大女性高級ファッション雑誌との相互影響関係を実証するという当初の方法はとれなかった。

4. 研究成果

本研究成果としては、新型コロナウイルス感染症の拡大によりアーカイヴ調査が行えなかったために、直接的なものと同接的なものが挙げられる。

(1) 本研究の直接的なものとしては、以下の研究成果が挙げられる。20世紀モダニスト男性作家である William Faulkner とアメリカ二大女性ファッション雑誌のひとつである *Vogue* との関係に着目した研究では、エドナ・ウールマン・チェイスとジェシカ・デイヴスの編集の下、1927年から1962年まで、アメリカ版ヴォーグ誌がウィリアム・フォークナーと彼の作品をどのように読者に媒介したかを追跡し、これまで見過ごされてきた、アメリカ版ヴォーグ誌によるモダニズム文学の宣伝、普及、広報に果たした役割に光を当てた。フォークナーとヴォーグ誌との知られざる結びつきを、文学的モダニズムと大衆雑誌の結びつきを示す模範的事例として用いることで、戦後におけるモダニズムの正典化が、ニューヨークを拠点とする印刷業界の協働による産物であったことを実証したものである。この研究成果の顕著なものが、海外査読付き雑誌 *The Journal of Modern Periodical Studies* に掲載された論考 "When Faulkner Was in *Vogue*: The American Women's Magazine Fashioning a Modernist Icon" である。

(2) 本研究の派生的なものとしては、男性モダニスト作家と雑誌・写真・映画といった視覚メディアとの関係について考察した、以下の研究成果が挙げられる。

はじめに、米国による日本占領後の1955年に来日した William Faulkner 出演による USIS 映画に関する研究成果が複数ある。USIS 映画『日本の印象』とアトムズ・フォー・ピース運動の関連性および当時のフォークナーの原子爆弾への態度については、グラスゴー大学 Andrew Hook Center for American Studies における招待発表 "Faulkner, Impressions of Japan, and the Atoms for Peace Campaign" において報告した。USIS 映画『日本の印象』の背景となったアトムズ・フォー・ピース運動を踏まえ、フォークナーの日本滞在記「日本の印象」「日本の若者たちへ」を考察した成果は、フォークナー訪日論集研究会での報告「映画になったフォークナー『日本の印象』研究 - 」で報告した後、共著論集の論考「映画になったフォークナー：『日本の印象』と USIS」にまとめた。1950年代におけるフォークナーによるTV番組『オムニバス』とドキュメンタリー映画『日本の印象』への出演について、製作元であるフォード財団と USIA との関係において調査した成果は、フォークナーとヨクナパトーフア国際会議での口頭発表 "Faulkner on Screen at Home and Abroad: The Ford Foundation, U.S. Information Agency, and a 'People's Modernism.'" にて報告した。加えて、同年1949年のノーベル賞を授与されているフォークナーと湯川秀樹が1954年と1955年に日本で放映された USIA 映画に出演している事実に注目した成果は、日本アメリカ文学学会全国大会での東京支部懇話発表「Faulkner と湯川秀樹 - ポスト占領期日本におけるアメリカの視聴覚教材 - 」にて報告した。

つづいて、フォークナーの『町』と『館』と USIA と広告評議会 AC の共同運動「人民資本主義」との関連を調査した成果として、中央大学人文研究所・研究会チーム「英語圏文学におけるグローバル、ローカル、エスニシティ」での招待講演「"From Jefferson to the World" フォークナーの『町』とグローバル資本主義」が挙げられる。

さらに、1936年における南部モダニスト作家 James Agee と写真家 Walker Evans の協働についての研究成果は、Evans の2冊の手製写真アルバムにおける貧困農民に対する視線について、フォーチュン誌にみられる後期ニューディール期特有の態度との比較において考察した、マルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルク (Zoom) での発表 "Regarding the Poverty of Others: Walker Evans, *Fortune*, and the Body Politics of the New Deal" ならびに Agee の掲載不許可となったフォーチュン誌草稿について、後期ニューディール政策およびフォーチュン誌の編集方針との相克という観点から考察した、共著論集の論考「南部小作農民の身体表象：ジェイムズ・エイジーと『フォーチュン』誌、一九三六年」にまとめた。

これら得られた成果の国内外における位置づけとインパクトは以下である。

本研究課題と関連する研究動向として、二つの重要な動向が認められる。一つは、モダニズムと大衆雑誌との関係を「文芸セレブリティ」という切り口から論じるものである。こうした研究で重要なものは、以下である Joe Moran, *Star Authors* (2000); Loren Glass, *Authors Inc.* (2004); Aaron Jaffe, *Modernism and the Culture of Celebrity* (2005); Faye Hammill, *Women, Celebrity, and Literary Culture between the Wars* (2007); Aaron Jaffe and Jonathan Goldman, *Modernist Star Maps* (2010); Jonathan Goldman, *Modernism Is the Literature of Celebrity* (2011)。こうした研究が提示する「文芸セレブリティ」という視点は、本研究に重要な視座を与えてくれたものであるが、こうした研究は、いわゆる文芸誌を扱い、女性作家を扱う傾向がある。女性ファッション誌と男性モダニスト作家との関係に注目した本研究課題は、新たな視座を提供したといえる。

もう一つの動向は、モダニズムと高級女性ファッション雑誌との関係を分析するものである。Michael Murphy, “‘One Hundred Per Cent Bohemia’” (1996); Nina Miller, *Making Love Modern* (1998); Jane Garrity, “Selling Culture to the ‘Civilized’” (1999) and “Virginia Woolf, Intellectual Harlotry, and 1920s British *Vogue*” (2000); Aurelea Mahood, “Fashioning Readers” (2002); Christopher Reed’s “A *Vogue* That Dare Not Speak Its Name” (2006), Michael Schueth’s “A Portrait of an Artist as a Cultural Icon” (2007); Faye Hammill, “In Good Company: Modernism, Celebrity, and Sophistication in *Vanity Fair*” (2010); and Catherine Keyser, *Playing Smart: New York Women Writers and Modern Magazine Culture* (2010)。これらの研究の特徴は、文芸寄りであった *Vanity Fair* あるいは *British Vogue* を研究対象としている点、かつ女性作家との関わりに注目するという点で、やはり本研究課題とは異なるものである。本研究課題は、この二つの研究動向を補完するものとして、さらなる発展に寄与したといえよう。

分析に未公開アーカイヴ資料を用いることからもたらされるはずであったインパクトと貢献については限られたものとなってしまったが、上記のように、独自の着眼点からの研究は、個別の作家研究に一石を投じる画期的な研究となるだけでなく、モダニズム研究と雑誌研究の双方に資する、当該および広域・隣接学問領域への波及効果の高い学際研究となったと自負している。

今後の展望としては、米国における「高級大衆雑誌」とモダニズムの相互影響関係の一端をアーカイブ調査によって実証することにより、「芸術のための芸術」という従来のモダニズム文学の定義を瓦解させ、現在アメリカ文学・文化研究において進行中のモダニズム再考、モダニズムと大衆文化の交渉といった諸問題に寄与したい。すでに大戦間期から大衆文化においてモダニズムの制度化が進んでいたことを示すことは、モダニズムは第二次世界大戦後のアカデミアによって制度化されたというアメリカ文学史・批評史に広く流布している定説を否定する、インパクトの高い研究となることが期待されるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Yamamoto	4. 巻 11
2. 論文標題 When Faulkner Was in Vogue: The American Women's Magazine Fashioning a Modernist Icon	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 The Journal of Modern Periodical Studies	6. 最初と最後の頁 127 ~ 127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5325/jmodeperistud.11.1.0127	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 2件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Yuko Yamamoto
2. 発表標題 Faulkner on Screen at Home and Abroad: The Ford Foundation, U.S. Information Agency, and a 'People's Modernism.'
3. 学会等名 Faulkner and Yoknapatawpha (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Yuko Yamamoto
2. 発表標題 Regarding the Poverty of Others: Walker Evans, Fortune, and the Body Politics of the New Deal
3. 学会等名 Embodied Acts and American Photographs (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山本 裕子
2. 発表標題 「Faulknerと湯川秀樹 - ポスト占領期日本におけるアメリカの視聴覚教材 - 」
3. 学会等名 日本アメリカ文学会全国大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山本 裕子
2. 発表標題 “ Faulkner, Impressions of Japan, and the Atoms for Peace Campaign ”
3. 学会等名 Andrew Hook Center for American Studies, University of Glasgow (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 相田 洋明編、山本 裕子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 松籟社	5. 総ページ数 240
3. 書名 『ウィリアム・フォークナーの日本訪問』 「映画になったフォークナー：『日本の印象』とUSIS」	

1. 著者名 中村 嘉雄、小笠原 亜衣、塚田 幸光編、山本裕子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 小鳥遊書房	5. 総ページ数 376
3. 書名 『モダンの身体』 「南部小作農民の身体表象：ジェイムズ・エイジャーと『フォーチュン』誌、一九三六年」	

1. 著者名 竹内 理矢、山本 洋平 (分担執筆：山本裕子)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 256
3. 書名 深まりゆくアメリカ文学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------